

シンポジウム：ファイン・アートとテクノロジー

Symposium: Fine Art and Technology

2009年12月5日[土] 14:00-17:00

東京藝術大学美術学部第I講義室

アートはギリシャ語のテクネー（技術）を語源にしていることから、その技術の粋^{すい}を堪能する場であるといえます。粋という領域、つまり「優れている」と形容するに相応しい技術力とは、単に先進性や品質を問うのではなく、必然の判断、重要度、タイミングなど全ての要素において美しいほどに絶妙であることが求められているのです。

テクノロジーの歴史において写真、映像、録音術が発明された19世紀以後、人は身体能力だけでは得られなかった高度な写実性能を手に入れました。昨今ではデジタル技術による高速演算も加わり、人に依らない生成態（オートメーション、ヴァーチャルリアリティなど）として、現代の美的概念にも強い影響を与えています。さて、人に依らない生成態が美しいほどに絶妙であるならば、残された我々の身体や感性は今後の美のプロセスにどう関わっていくことになるのでしょうか。

本シンポジウムでは「テクノロジー」という側面から「美術」を読み解き、表現と技術と美術／身体・感性の（非）介在／これからの美術のプロセス／“ファイン”なアートとは何か／などについて、近現代の国内外の美術の動向を交えて探り、芸術の根幹に迫ります。

シンポジウム：ファイン・アートとテクノロジー

パネリスト：畠中実、梅津元、林卓行

日時：2009年12月5日[土] 14:00-17:00

会場：東京藝術大学（上野校地）美術学部中央棟第I講義室

入場料：無料（事前予約不要、当日先着順、定員150名）

主催：東京藝術大学、東京藝術大学美術学部附属写真センター
企画責任：椎木静寧（東京藝術大学美術学部附属写真センター）

助成：平成21年度文化庁芸術団体人材育成支援事業、

藝大フレンズ賛助金助成事業、

公益財団法人野村国際文化財団

協力：株式会社スタート・ラボ、株式会社ニコン

ウェブサイト：<http://dazzling-garando.com/symposium/>

■畠中実（NTTインターコミュニケーション・センター[ICC]主任学芸員）
1968年生まれ。1996年の開館準備よりNTTインターコミュニケーション・センター[ICC]に携わる。主な展覧会企画に「ビル・ヴィオラ ヴィデオ・ワークス」（1997）、「サウンド・アートー音というメディア」（2000）、「ダムタイプ：ヴォヤージュ」（2002）、「サウンディング・スペース」（2003）、「ローリー・アンダーソン 時間の記録」（2005）などがある。その他、コンサートなど音楽系イベント企画、ゲストキュレーションなど多彩に活躍。主な書籍に『200CD ザ・ロックギタリスト』（共著・学習研究社、2006）など。また、国内外の展覧会カタログの他、『美術手帖』、『ARTiT』、『スタジオボイス』、『ユリイカ』などへの寄稿多数。

■梅津元（埼玉県立近代美術館主任学芸員／芸術学）
1966年生まれ。1991年多摩美術大学大学院修士課程修了。同年より埼玉県立近代美術館学芸員として勤務。主な展覧会企画に「くうつすこととく見ることー意識拡大装置」（1994）、「光の化石ー瑛九とフォトグラムの世界」（1997）、「ドナルド・ジャッド 1960-1991」（1999）、「プラスチックの時代ー美術とデザイン」（2000）、「アーティスト・プロジェクトー関根伸夫《位相ー大地》が生まれるまで」（2005）、「ニュー・ヴィジョン・サイタマⅢー7つの目×7つの作法」（2007）などがある。その他『ユリイカ』、『インターコミュニケーション』、『美術手帖』などへの寄稿多数。

■林卓行（玉川大学芸術学部ビジュアル・アーツ学科准教授）
1969年生まれ。1997年東京芸術大学美術研究科博士後期課程在学満期退学。2007年より玉川大学芸術学部ビジュアル・アーツ学科准教授。著書に『ウォーホル』（『西洋絵画の巨匠9』、小学館、2006）。共著に『現代芸術論』（藤枝晃雄編、武蔵野美術大学出版局、2002）、『西洋絵画名作101選』（小学館、2003）、『印象派美術館』（小学館、2004）、『日本近現代美術史事典』（多木浩二・藤枝晃雄監修、東京書籍、2007）など。『美術手帖』、『文学界』、『武蔵野美術』、『10+1』、『REAR』などへの寄稿の他、美術批評多数。2000年～2002年ギャラリーαMゲスト・キュレーター。



お問い合わせ：Tel&Fax 050-5525-2294 E-Mail info@dazzling-garando.com